# 『イザベル・スチュアートの時祷書』に見る願いのかたち
## ―「生」と「死」の接続から生まれ出づるもの―

田邉めぐみ（関西大学）

時祷書は、フランス中世末期に多くの世俗信者が日々の祈祷に用いた書物である。それ故に、テクストや祈祷像から写本の注文主・所有主の祈念内容が浮き彫りにされてきた。発表者は 1430 年頃から 16 世紀初頭にかけてブルターニュ公家や、その周辺の者によって注文・所有された時祷書を対象に子宝祈願と弔いの表象に関する調査（JSPS 科研費：課題番号 21K00103）を進めるなかで、先行研究において十分留意されないままにあった伝統的なキリスト教図像の意図的な改変や、それらとの有機的な関係構築のために駆使されている世俗図像や装飾モチーフによって個人的な祈念表象が巧みに生成されている例を多数確認している。

本発表で取り上げるのは、ブルターニュ公フランソワ 1 世（在位 1442-1450）の妻イザベル・スチュアート（1427-1494）が所持した時祷書(Paris,BnF.ms.lat.1369)である。本書が彼女のために制作されたことは、様々な要素に確認し得る。教会暦や「執り成しの祈祷」にはブルターニュ地方で篤く信仰されていた聖人が多く含まれるうえ、複数ページの余白部分には彼女のサインが記され、紋章にあっては装飾イニシャルや欄外、そして祈祷像の衣装にまで施されているのである。いっぽう、1450 年代に列聖された聖人が「執り成しの祈祷」に認められる本書に、1450 年 7 月に逝去していたフランソワ 1 世の祈祷像や紋章が挿入されていることは、一見不可解に見える。先行研究ではイザベルの「弔いのかたち」と捉えられてきたものではあるが、対面ページから始まる聖母マリアへの祈祷文「*Obsecro te* あなたに切に願う」は、イエス・キリストの受肉におけるその役割や、母親としての歓びが冒頭に記されていることから、聖母子像に祈りを捧げる写本所有主の姿が添えられることで、子宝祈願の表象をなすことが多かったものなのである。この一見奇妙な組み合わせからは、世継ぎの男児に恵まれなかった公の遺言に応じて 1455 年に成立することとなった長女マルグリット（1443-1469）と後のブルターニュ公フランソワ 2 世（在位 1458-1488）の結婚との関連性が見えてくる。そして、夫の死後も祖国に戻ることなく寡婦としてブルターニュで生涯を終えることになったイザベルの立場や、新たな公の妻となったマルグリットが子宝に恵まれないままこの世を去ることになったこと、さらに本書の来歴とを考え合わせれば、様々な「弔い」と「子宝祈願」の表象が公国の安泰ではなく、イザベル自身の安泰を願うものとして制作され、機能し続けていたと結論付けることが出来よう。

本発表では、イザベルが所持した他の写本との比較を交えながら、伝統的なキリスト教図像からの逸脱を示す諸要素の生成要因とその機能を多角的に考察することで、家父長制のもとでの女性の祈念表象の特異性を明らかにしてゆく。